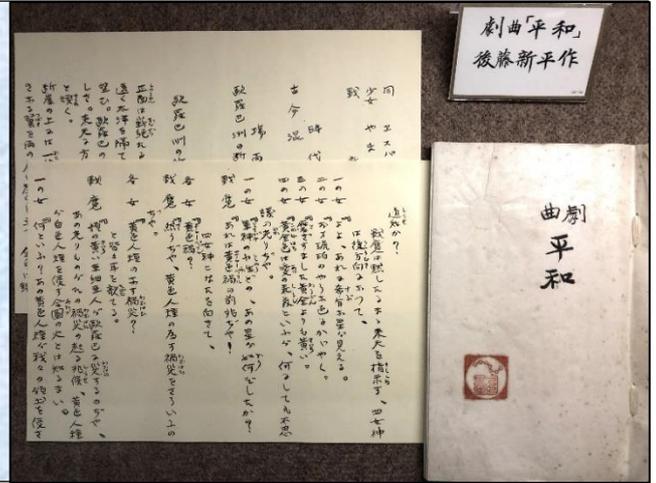


# 劇曲「平和」初上演!

約110年前、後藤新平が原案を作成し、詩人の平木白星が執筆した劇曲「平和」が、5月31日、東京内幸町ホールで初上演されました。東京の「後藤新平の会(事務局:藤原書店)」主催で、併せてシンポも実施されました。

当館で原本を常設展示している「劇曲『平和』」が、令和2年(2020年)、藤原書店から刊行されました。東京大学加藤陽子教授が「黄禍論への対策といった捉え方を超える面白さがこの脚本にはある。日露戦争後の後藤の世界戦略として知られる東西融和論、大アジア主義、新旧大陸対峙論等の神髓が、より豊かに展開されているだけでなく、波乱に富んだ内容も面白いのだ。」と解説に記しています。

久米正雄が、「一刻も早く『平和』をプロデュースする時が来たらんことを望んでやまない。劇曲『平和』を単なる紙の劇曲たらしむるのは、現歌劇壇の恥辱である。」と語ってから一世紀が経過しました。



## 【公演「劇曲『平和』」】<あらすじ>

「誘惑者」が平和の虚偽を暴き、人々を戦に向かわせようとたぶらかす。

ここは天上界の平和大主神の御座、平和を謳歌する音楽が流れる中、人間界から列強国を代表する4人の女性が訪れ、万国平和会議の成果を報告するうち、誘惑者に唆され、自国の手柄を言い立て争いになる。その混乱に乗じて誘惑者は「平和の新経」を平和大主神に戯れ歌とともに提示、その欺瞞性を見破られるが、懲りずに言葉巧みに誘惑しようとする。平和大主神は誘惑者の口を封じ、末の王子を平和の使者として人間界に遣わす。

所変わって西洋とアジアの境界、誘惑者は口を封じられ、代わりに楽器の音や妖しい文字で人々をたぶらかすが……



## 【シンポジウム】<地元紙「岩手日報」より>

俳優の榎木孝明さん、元駐仏・駐韓大使の小倉和夫さん、東北大学大学院の伏見岳人教授が登壇。読売新聞社特別編集委員の橋本五郎さんがコーディネーターを務め、物語に込められた意図を考察した。

榎木さんは、「役者として常々、戦争や死生観について鈍感になっているという危機感と悩みがあった。戦争や平和といった言葉が絵空事になっていないか。劇曲が問題提起をしてくれた。」と感想を述べた。

本作を読み解く上で重要なのが、人々を戦争に駆り立てる誘惑者の存在だ。小倉さんは「戦争は(権力者)一人が決めれば始まってしまうが、平和は相手と話し合い、作り出さなければならない。平和を乱す誘惑に駆られる者が出て来た時、対応するのは国民だ。」と強調。

誘惑者は常に私達の傍にいと印象づけるラスト。伏見さんは「難問に向き合い続け、克服しなければいけないというメッセージではないだろうか」と締めくくった。



## 【後藤新平生誕祭】6月4日(火)<於:後藤新平旧宅>

数年ぶりに、通常開催となりました。こじか幼稚園による「自治三訣」の唱和と歌。椿の会による新平顕彰歌「ゆかりの巨像」の斉唱。

その後、紫波町志賀理和氣神社前宮司田村勝則氏による「母望の人・後藤新平」という演題でご講演をいただきました。野村胡堂や明治神宮との新平との縁の話は、田村様ならではのお話で、あっという間の時間を過ごしました。

